

An informational overview on in-vitro allergy testing

Animal Dermatology Clinic (アメリカ・カリフォルニア州) 訪問

アメリカにある私立の獣医皮膚科専門病院 (<http://www.animaldermatology.com/home>) の数ある病院のうち、カリフォルニア州 Tustin の病院で 2011 年 8 月 29 日から 1 週間にわたり研修をしてきた。その治療方針など、注目した点を抜粋してお伝えする。

❖ 皮膚病理の診断

主に Tustin 病院に勤務される Rosenkrantz 先生は他病院からの依頼された病理スライドを見てレジデントに教育しながら診断を下していた。驚いたことに顕微鏡においたスライドを直接手で素早く動かしながら病理所見と診断を述べられ、その結果を紙面ではなく声で記録する形式をとっていた。スライドを見てすぐに所見と診断の録音をよどみなくされる Rosenkrantz 先生の姿に、練達の専門医の力量を見ることができた。



左より Dr. Muse、レジデントの Dr. Rosenberg、安田、
レジデントの Dr. Udenberg、レジデントの Dr. Stich

❖ 診療の基本

皮膚科の場合においては問診がきわめて重要であり、Muse 先生は 9 割の症例は問診で症状の判別がつくと話されていた。視診・触診は丁寧に行い、細胞診もほぼすべての症例で行っていた。また、難しい症例や確定診断のためにはバイオプシーを行っていた。

❖ ノミアアレルギー対策

地域柄、ノミアアレルギーは非常に多く見られた。問診や視診で腰背部に痒痒感が見られる場合に櫛を使ってノミの成体や糞などを確認し、見つければ即治療を行う。ただし、見つからない場合でも明らかに腰背部の痒痒が強く疑われる場合はそのまま治療を行うことが殆どであった。

治療薬の選択では即効性 (投与後 4 時間で効く)・効果・通常月 1 度の投与でよいという簡便性を重視して Comfortis (イーライリリー社) を第一選択としていた。もしそれでも治療効果が十分に上がらない場合は月 1 度でなく 3 週間に 1 回の投与に変更するなどしていた。嘔吐などの副作用については、Rosenkrantz 先生も Muse 先生も特に心配しておらず、おこるとしても投与の初期に出るのみであると話されていた。また、Rosenkrantz 先生には、もし心配であれば最初の 1 回分を朝晩 2 回に分けて投与する方法もあり得るとの見解をいただいた。

滴下式ノミ駆除・予防剤の使用については、耐性を持つ個体が出ているとの研究報告*があるため、使用を控えているようであった。

*C. Bass, et al. "Identification of the Rdl mutation in laboratory and field strains of the cat flea, *Ctenocephalides felis* (Siphonaptera: Pulicidae)" *Pest Manag Sci* 60:1157-1162 online:2004

❖ 落葉状天疱瘡

落葉状天疱瘡の治療には免疫抑制関連の薬を使うことが基本であるものの、ステロイドは極力減らすためにアトピカやアザチオプリンを主に用いていた。これは猫でも同様で、シクロスポリンはむしろ猫のほうが犬と比べて副作用が少ないために7～10mg/kg/dayで維持し、念のため肝臓と腎臓の機能を再検査でチェックする方針を取っていた。

その後、ヨーロッパ獣医皮膚科学会（ベルギー：ブリュッセル）に参加して得た最新情報では、猫用アトピカが12月から欧州で発売予定との事。

❖ 抗菌剤の選択について

様々な報告が出ている通り、耐性菌についても大きな問題となっている。Muse先生はブドウ球菌の耐性菌は現在では3～4割ほどは耐性を持つ菌であるとのコメントをしてくださった。

実際の治療においては、治療歴がない場合はそのままセファレキシンを使用するものの、治療経過が良好でない場合、過去にセファレキシンなど他の薬剤を使用したものの治療効果がよくなかった場合や、桿菌が見つかった場合で現在治療中の抗菌剤で経過が改善されている場合を除いては、やはり感受性試験を行う方針を取っていた。

❖ アトピー性皮膚炎の治療について

まずノミや細菌などの二次感染をコントロールし食事管理を十分に行った上で、なお痒痒症などが残る場合に皮内反応試験を行った上で抗原特異的免疫療法を行うことを基本としていた。この方法は治療方針の中で極めて重要な位置を占めており、Rosenkrantz先生も他の治療方法と比較して”safest, longest (最も安全, 最も長期)”使用可能なもので、抗原特異的免疫療法のみで維持することを”ultimate goal (最終目標)”との考えを持っていた。なお、皮内反応試験を優先させるのは専門医であるからという意味合いも大きく、決して血清検査を否定するものではなかった。鎮静が必要な皮内反応は鎮静による危険を回避するためにパグなどの短頭種ではあまり行わないこと、猫では反応がよくないため血清検査を優先させることが多いことなども話されていた。また一般の開業医は期限が1年ほどで失効してしまう抗原を大量に買い込むことはリスクが大きすぎるとして行うべきではないとしていた。

❖ ジェネリック医薬品について

アトピカなどの使用に関連して、この病院ではジェネリック医薬品の使用をどのようにとらえているかと聞いたところ、アトピカに限らずできる限り正規品を処方するとのことであった。理由はジェネリック医薬品では効果が一定しないためである。

❖ 精神性に由来する痒痒や脱毛について

滞在中、精神性に由来する痒痒症や脱毛症の症例は見られなかった。これについて Muse先生に質問をしたところ、そもそも精神性の問題は”very uncommon”であること、ノミや二次感染のコントロール・食事療法・抗原特異的免疫療法など様々な可能性を試してみて、ステロイドを使用してみて、それでも解決しないのであれば検討しなくもないが、少なくとも鑑別診断の中では最下位に位置すると話された。昨年イタリアのフィレンツェで開催されたヨーロッパ獣医皮膚科学会において、アメリカのDouglas DeBoer先生が難治性舐性肉芽腫性皮膚炎の診断と治療の講演において“さまざまな要因の除外診断が必要であり、安易に精神的な問題と診断してはならない”と警鐘をならされていたことが思い出された。



スペクトラム ラボ ジャパン 株式会社
〒152-0034 東京都目黒区緑が丘1-5-22-201
TEL 03-5731-3630 FAX 03-5731-3631
E-mail: info@SLJ.co.jp
http://www.SLJ.co.jp